

## シンポジウム『ヒューマンケアの探究』報告

# 自分らしく死の準備をして 生き抜くということ

浅野美知恵\*

\*上智大学大学院総合人間科学研究科 看護学専攻がん・緩和ケア看護学/総合人間科学部看護学科成人・老年看護学教授

## はじめに

上智大学総合人間科学部では、ラジオ NIKKEI のがん患者向け番組(『がんからの出発』、『働くがん患者学校』)との共同企画として、2011年9月9日(金)にシンポジウム『ヒューマンケアの探究～自分らしく死の準備をして生き抜くということ～』を開催した。

このシンポジウムの目的は、ドキュメンタリー映画『エンディングノート』に描かれた「終末期のがん患者、および、その家族の様子」を題材に、同映画監督の砂田麻美氏と緩和医療医師・大津秀一氏(東邦大学医療センター大森病院緩和ケアセンター副センター長)をゲストに迎え、看護学科など将来医療の現場に携わろうと考えている学生、がん患者、その家族、そして、死生観・ヒューマンケアに関心のある方が集い語り合うことにより、自身の死生観に向き合うこと、ヒューマンケアについて示唆を得ることであった。

本稿では、シンポジウムの概要および看護学科学生3名のレポートを報告する。本学部の看護学科は2011年4月に開設され、現在の1年生は1期生である。

## シンポジウムの概要

はじめに、映画『エンディングノート』を鑑賞した。この映画は、終末期がん患者とその家族の様子を追ったドキュメンタリーで、2011年10月1日の全国公開前に試写として上映した。次に、「終末期のがん患者とその家族から学ぶ死生観」と題して、砂田氏と大津氏と浅野(筆者)が鼎談した。主な内容は以下であった。

死を受け止めるということに関する話では、今回の映画『エンディングノート』について、撮影におけるエピソードなどの砂田氏の語りから、映画の背景や主人公の生きざ

ま、グリーフワークなどの理解を深めた。

死生観、どう生きるか?に関する話では、大津氏の著書『死ぬときに後悔すること25』の25項目の紹介、死を準備すること、被災地での医療活動などについて大津氏の話から、日本人の死生観について語り合った。

ヒューマンケア、緩和ケアに関する話では、緩和ケアはヒューマンケアの一部であり、緩和ケアで大切なことなどを語り合った。医療者として患者のトータルペインを緩和しQOLを維持・向上させること、ともにいること、家族ケアが必要であることなどが強調された。

さいごに、トーク(質疑応答・意見交換など)では、会場にいる学生、がん患者およびその家族が語り、有意義な時間を共有できた(図1)。

なお、本シンポジウムの内容は、ラジオ NIKKEI の番組『がんからの出発』で2011年9月25日(日)、10月9日(日)、23日(日)の21時から放送された。また、番組ホームページ(<http://www.radionikkei.jp/inochi/>)にアクセスすると、放送内容を聞くことができる。

## 看護学科学生のレポート

### ●死の準備とそれを支える人

佐成良太(総合人間科学部看護学科1年)

“死の準備って何?”シンポジウム『ヒューマンケアの探究』に参加するまで見当がつかなかった。僕は看護学生の端くれなのにもかかわらず、「死」というものを怖い存在として、考えることを忌避していた。今回、死を迎える方とその家族を映した砂田麻美監督のドキュメンタリー映画『エンディングノート』を鑑賞し、また、シンポジウムでの話合いで、死の準備をすることの大切さ、そして死を迎える人を支えることについて考えさせられた。

人がいつ死ぬのか、死後どうなるのかは誰にもわからない、大切な人と離れてしまうのかという恐怖もある。しか



▲図1 「終末期のがん患者とその家族から学ぶ死生観」の鼎談  
左から筆者、砂田麻美氏、大津秀一氏。  
(写真提供：ラジオ NIKKEI 宮崎様)

し、「生」とともに「死」は誰もが通るスタート地点であり、大切な人と一時的に離れるだけで、また皆そこから新たな道を歩むことになるのだと思う。映画の主演、砂田知昭さんはそのようなことを知っており、準備としてエンディングノートを作成し、死を「尊重」していたように見受けられた。

試写では映画が進行するにつれ、砂田さんの体調が悪くなっているのが目に見えてわかり、会場内一同が涙ぐむ場面が多々あった。しかし、映画全体は、予想とは違い、明るくユーモアがあり、会場では笑い声さえ響いていた。もちろんそれは監督の編集の結果でもあるが、砂田さんが死を迎える人に似つかわしくない快活さと力をもっており、また、砂田さんの家族が懸命に砂田さんを支えていたからだと思う。葬儀場の手配や、友人の連絡先などを保管し、残された時間を家族と有意義に過ごすといった砂田さんの死の準備、そしてそれを支えた家族の行為は、素晴らしいヒューマンケアであるといえる。亡くなっていく砂田さんと遺される家族と一緒に準備しお互いをケアすることができたことによって、死後にあわててそのような手配をする必要なしに、温かい思い出とともに砂田さんを送り出していたのではないと思う。

将来ターミナルケアを行うことになったとき、「死の準備」を少しでも手伝える看護師になれたらな、と思った。

## ●いのちめぐり

亀井陽子(総合人間科学部看護学科1年)

「上手に死ねるのか」。この疑問に自信をもって答えられる人間はいるだろうか。映画『エンディングノート』に吹き込まれたこのフレーズを私は頭の中で反芻した。この映画、そして、ヒューマンケアの探究と題するシンポジウムを体験し、私の考える死生観が疼き、改めて自分の考える死生観を少し形にできたと思う。

生と死。生は、自分自身またはその人が存在していることであり、生きている間は、あらゆるものにかかわり、影響しあっていく。つまり、生きるとは、常に変化していくものであると考える。逆に死とは、生きているときの変化は終わってしまうものの、生きていたときの変化の影響がさまざまな所で反響し、その人と触れ合ったことのある人や物に変化を与え、またそれが変化し続ける、ということである。つまり、いのちはめぐるので。

生と死は、人類、生物、命あるものにはすべて備わっている。ある意味で平等であり、また自由なものでもある。生き方も人それぞれであるならば、死にゆくその人の気持ちや最期のときも、それぞれなのではないか、と私は考える。

ヒューマンケアに関しても、同じことが言えると思う。人間が一人ひとり違うように、ケアに関しても、1つとして同じものはない。映画での砂田知昭さんのように、死への準備ができる人もいれば、不慮の事故に遭い、自分で死への準備ができない人もいるのだ。ヒューマンケアとは、人のさまざまな感情、思いを汲み取り、少しでもケアする人に対しての力となることである、と私は考えている。

そして、シンポジウムを経て、患者に対して、「がんばれ」という言葉は必要であるのか、疑問が残った。病气やけがある状態というのは、すでに身体的、精神的にがんばっている状態であり、それに対してがんばれ、という言葉は不必要に思えた。

将来、看護を生業とする人間になったら、臨機応変なケアを一人ひとりの患者に実施していけるような人間になりたいと考えている。

## ●死の迎え方 ～『ヒューマンケアの探究』に参加して～

山口あずさ(総合人間科学部看護学科1年)

私がこのシンポジウムに参加した理由は、2つある。1つ目に、人が死を目前にすると、どのような心境になり、何を思うのか。2つ目に、その家族は当の本人に対して、どのような振る舞いをするのかということである。今回鑑賞したドキュメンタリー映画『エンディングノート』は、上記の私の疑問を解決してくれた。

死を目前にした人の反応は、極端に言えば2通りあると

私は考えている。一方は、自分の殻に閉じこもり、他者とかかわりをなくし、ひっそりと残りの自分の人生を歩む場合である。他方は、残りの人生を後悔せずに歩むために、他者とかかわりをもつ、あるいは今まで以上にかかわりをもつ場合である。

映画の出演者である砂田知昭さんはまさに後者であった。砂田さんは、医師から病状を伝えられるシーンにおいて、回復を願う姿が伺えたが、それでも神父を訪ねたり、式場の下見に行くなどの、「死の準備」を自分で進めていた。これらは、自分の死を冷静に客観的に受け入れることができたからこそその行動であるといえる。

周りの家族はというと、残されたわずかな時間に焦りを感じさせない振る舞いをしていた。むしろ、家族は砂田さんとかかわる機会を多くつくっていた。今回のこの映画では、患者と家族がかかわりを多くもつことによって、家族と患者自身でヒューマンケアを行っていたのである。ケアの知識や病いの知識をもつ看護師は、セルフケアが困難な患者とその家族をつなぐための窓口にならなければならない。そうすることで、大切な家族とかかわりを、隔たりなく行うことができるからだ。砂田さんが最期まで家族と時間を共有していたように、やはり、長い時間をともに過ごしてきた家族というのは、最期までともにいたいものである。

この映画では、段取りよく死を迎え入れていた。私には、このような段取りをつけることが、活動を機械的にさせる

おそれや、最期まで To do に縛られてしまうおそれがあるように思える。人によっては、計画性をもった最期は砂田さんのように後悔なく死を迎えることができるかもしれないが、私は無計画に最期を迎えるのも、すごく自然で、人間らしい死の迎え方だと考える。人間の死に方、生き方、ヒューマンケアについて、さらに学びを深めたい。

## おわりに

今回のシンポジウムをとおして、参加者はそれぞれの立場で学びを深め、自身の死生観に向き合うこと、ヒューマンケアについての示唆を得ることができた。さらに、集うこと、語り合うこと、関心を寄せて心を開くこと、現象を理解すること、看護のプロとして寄り添うこと、などの大切さを改めて考えさせられた。

上智大学総合人間科学部は、人間の尊厳を基盤としてヒューマンケアの実現のために貢献できる人材育成を教育目的としており、ヒューマンケアをいかに実践するかが大きな課題の1つである。今後もさまざまな形でヒューマンケアを探究する機会を提供していきたい。

最後に、今回の映画試写およびシンポジウムを開催するにあたり、ご協力いただきました多くの方々に感謝申し上げます。

なお、本稿中で紹介した学生3名のレポートは本人の承諾を得て掲載したものである。

## がん看護

### がん患者の退院支援

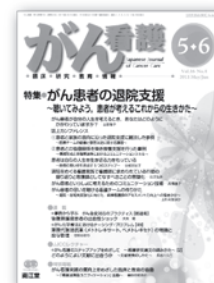
～聴いてみよう、患者が考えるこれからの生きかた～

— 16巻4号(2011年5-6月号) —

#### ●特集編集 山田雅子/吉田千文

がん患者が自分の人生を考えると、あなたはどのようにかかわっていますか?/誌上カンファレンス(1) 患者と家族の意向に沿った退院支援に難渋した事例～医療チームの協働と意思決定に関する課題~/誌上カンファレンス(2) 患者との協働関係を築き療養支援を行った事例～信頼形成と多職種連携におけるコミュニケーションスキル~/患者は自らの人生を生き切る力をもっている～患者の思いを引き出す5つのステップ～ ほか

■ A4変型判・96頁 2011.5. 定価1,680円(税込)



南江堂